

体育・スポーツ専攻生のためのキャリア教育の実践

牛山眞貴子¹⁾

The Plan of Career Education for Students of Physical Education

Makiko Ushiyama¹

Key words: career education, physical education

(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education,
Ehime University, 7,77-86, March, 2010)

キーワード：キャリア教育, 体育

I 緒言

リーマンショック以降、日本経済は停滞し、不況が続いている。2009年から有効求人倍率は0.46倍の低水準を推移し、就職希望者の半数は無職の可能性に晒されている。就職内定率も低水準の上、下降線を辿るなど、10年前には想像もつかなかった状況が現実を包み込む。リクルート社「学生の内定状況調査」によると、2005年度内定率は全体64%、体育・スポーツ学生を含むカテゴリーである文系男子66.4%文系女子58.6%であった。

2010年度の全体は63.5%と僅かな下げ幅で留まっているが、文系男子63.5%文系女子54.7%は共に約4%近くダウンしており、依然大学生の就職は氷河期が続いているといえる。当然、日本全体がこの状況ならば、体育・スポーツを専攻する学生を取り巻く就職の環境も、非常に厳しい状況にある。求人が少ない等の採用側の事情も然ることながら、就職する側である学生の就労意欲の薄さ、大卒就職希望者の社会人基礎力の質的低下、就職活動すら行わない無活動学生の増加、3年以内の早期離職者の増加が、社会問題として挙げられている。

もはや、大卒の就職が安定している時代ではない。この現実、送り出す側の大学教職員は危機感を感じ

ずにはいられない。しかし、当事者である体育・スポーツを専攻する学生及び運動部に所属する学生の危機意識は一般学生に比べて薄く、愛媛大学においても、運動部や体育・スポーツ専攻生の中に、「スポーツを一生懸命取り組んでさえいればいい。そうしていればOBの引きやスポーツ・キャリアが強みになって就職は何とかなる」という幻想や風評に引きずられている傾向が強い。そのため、「スポーツしかできない・部活人間」体質が生まれ、社会人基礎力の構築を阻害し、就労意識が希薄なまま3年生の後期を迎えてしまう実態に繋がっている。これでは、大学及び学部単位で行う一般学生対象と同じキャリア教育・キャリア形成支援では対処しきれない。この状況を踏まえ、体育・スポーツ専攻生対象の特別なキャリアデザイン「食える体育人を目指す」をコアにしたキャリア教育の必要性が問われ改善が検討された。愛媛大学教育学部保健体育講座では、改善策として、2008年から愛媛大学教育学部の生涯学習群としてスポーツ健康科学課程が新設されることを機に、体育・スポーツ専攻生のための早期キャリア教育の授業科目を立ち上げた。

本研究は、愛媛大学教育学部スポーツ健康科学課程の「スポーツ・ダンスキャリアデザイン論」の実践を報告・省察することによって、より充実したキャリア教育を目指すことを目的とする。

1) 愛媛大学教育学部
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,
Bunkyo-cho 3, Matsuyama-shi, Ehime,
〒790-8577, Japan

Ⅱ キャリアデザイン

(1) キャリアに関する学生の意識と環境

「キャリア」とは、長期的な仕事生活の在り方に対して見いだす意味付けやパターンの中で、金井(2002)は「成人になってフルタイムで働き始めて以降、生活ないし人生全体を基盤にして繰り広げられる長期的な仕事生活における具体的な職務・職種・職能での諸経験の連続と、大きな節目での選択が生み出していく回願的意味付けと将来構想・展望のパターン」と定義づけている。以下、キャリア教育の出発点でもあるキャリアデザインの課題について論述する。

① 学生の就労意欲

大学生の就労意欲の低さは、「どんな仕事がしたいか」の質問に「やりたいことがわからない」と答える学生の多くの回答からも明らかだろう。その第1の要因として、まず何のために働くのか、「働く理由」が見いだせない点が挙げられる。日本の学生の気質が変わり、「なぜ人は働くのか」と問いを掘り下げていく思考を煩わしいとする傾向が強くなる。そのため「働く理由」を切羽詰まるまで考えようとしないう。大学の授業を受け、単位を取って卒業する。しかし卒業はできても、学生の前に就職先が待っていてくれるわけではないという現実が、ギリギリになるまでイメージできないのである。この現実と学生を早期に向き合わせることで、まずキャリア教育の第1歩である。したがって、早期(1年後期-)からのキャリア教育が望ましい。

② 親の保護

第2の要因として、「親の保護」が挙げられる。他の先進国と比較しても日本の大学生は考え方が幼いと言われ、「成人になったら経済的に自立する」と捉える意識が薄い。「親に養われる子供のような成人」が日本の大学生の将来像にかぶさってくる。

また「職は親が用意するものではなく、自己の行動で探し当てるもの」。そのように理解している学生も、親の保護と干渉が、自立の妨げとなって行動に移せないでいるケースもある。ただ、近年、日本では、親の状況も変化してきており、不況の煽りを受け親の収入の減少・リストラや老後不安から、親は子供の経済的自立を以前よりも強く求めるようになってきた。これは大学生のキャリア教育にとっては好材料であり、親の保護の影響は、今後薄くなっていくだろう。

③ 職業観

第3の要因として「職の選択」に関する知識・情報の欠如である。仕事はお金か？ やりがいか？・・特に体育・スポーツ専攻生は自己の強みとしてスポーツ・キ

ャリアを有しているため、スポーツを職業とすることが人生の成功と捉える傾向が強い。

まず、新入生は入学時点でプロ選手、スポーツトレーナー、スポーツインストラクター、体育教員を将来の職として挙げる。が、日本でプロ・スポーツとして選手が職業化されているのは、相撲・野球・サッカー・バスケットボール・バレーボール等数える程で、その中でも相撲・野球は高収入といわれるが、それも限られた現役生活の中で一握りの選手だけに限定されたものであり、決して生涯の安定が約束されているわけではない。

「お金ではなく、やりがいで選んだ仕事」の場合、スポーツ選手やダンサーの職はキャリアを存分に活かせるが、経済的リスクは高く「食べる」ようになるまでの見通しが立たないケースが多い。

スポーツトレーナー・インストラクターについても、企業/団体の受け皿が少なく、3K(きつい、厳しい、汚い)仕事といわれている。トレーナー・インストラクター共に種目が多様に担当できる器用さが必要であり、サービス業としての顧客サービス、施設の清掃や受付、施設管理面でオールマイティにこなす業務能力が求められる。自己の得意種目のみのトレーナー・インストラクターを目指すためには、フリーという選択肢もある。が、これも失敗の確率、経済的なリスクが高い。

体育教員についても、教員採用試験合格の厳しさは周知の通りで、特に高校は臨時採用・非常勤講師の経験のない新卒では、まず受からないのが現状である。

他方、お金=収入だけでの仕事を選んだケースの場合、悔いの残る選択をしたケースでは適性面でのミスマッチなどから精神的ストレスが増し、生活の安定と引き換えに充実感を失うことが問題になっている。

城(2008)は著書「3年で辞めた若者はどこへ行ったのか」の中で、収入で仕事を選び、出世を仕事の目的に働くことを選んだ若者が、早期に仕事を辞め、やがて、リスクは高くても自己の本当に望んだキャリアに向う複数の若者の事例を挙げている。

(2) キャリアをデザインする

「キャリアを考える」・・これは、仕事・生活・人生と繋がることは周知のことであり、そこで自分自身がキャリアをどのように形成していくかという「デザインをする」ことが必要になってくる。これがキャリアデザインである。キャリア教育は、たたき台となる学生のキャリアデザイン(例、10年後の私)の設定から始まる。

田路・月岡(2008)はキャリアを「デザイン」することは毎日考えるようなものでなく、節目(移行期)で考えるものであって、節目以外のときはあえて「ドリフト」(一流れにのる)ことを指摘している。なぜなら全てをデザインしてその通りに遂行することにとらわれてしまうとその殻から抜け出すことができなくなってしまう危険性も、キャリアデザインは孕んでいるからだ、

したがって、可能性を持つキャリアデザインとは、デザインという枠を設定することでキャリアの目指す方向が明確になり、ドリフトすることでキャリアの可能性を拡大することとして捉えることができるだろう。

Ⅲ 愛媛大学におけるキャリア形成支援

若年者層のキャリア支援が、国策としても推進され、大学教育におけるキャリア支援がより一層求められるようになった。愛媛大学では以前から就職支援は行われていたが、大きな転機となる2007年以降、就職活動や内定獲得のための支援に留まらず、学生が社会人として自立し、それに必要なキャリアを形成していくことを支援していく「キャリア形成支援」に内容が変化している。その特徴としては進路や就職先を選択し、決定していくプロセスには様々な過程があるため、良質な情報提供と社会人基礎力を高めていくサポートを挙げることができる。

<22年度予定されているキャリア形成支援>

- ① 第1回就職プレセミナー
就職ナビ登録説明会
- ② 第2回就職プレセミナー
適性検査無料体験会
- ③ 第3回就職プレセミナー
今から始めるSPI筆記試験対策
- ④ 第4回就職プレセミナー
自己分析の進め方
- ⑤ 全学就職ガイダンス
就職活動を始めよう
- ⑥ 第1回就職セミナー
スタートセミナー就職活動を始め方
- ⑦ 第2回就職セミナー
業界研究・企業分析
- ⑧ 第3回就職セミナー
志望動機と自己PR
- ⑨ 第4回就職セミナー
エントリーシート対策
- ⑩ 第5回就職セミナー
就活マナーとコミュニケーションの取り方
- ⑪ 第6回就職セミナー

面接対策

- ⑫ 国家公務員セミナー
- ⑬ 愛媛大学生のためのキャンパスフォーラム
- ⑭ 国家公務員採用試験制度説明会
- ⑮ 愛媛県警察職員採用説明会
- ⑯ 松山市職員(消防職員を含む)採用試験制度説明会
- ⑰ 愛媛県職員採用制度説明会
- ⑱ その他

マナー&コミュニケーション講座

面接対策(集団面接/グループ面接/個別面接)

理学系学生のためのテクノキャリアカンファレンス(合同企業説明会)

上記の内容は、愛媛大学就職支援課による企画であり、愛媛大学ガイドブック(平成21年度、22年度版)から抜粋した。他に学部単位(教育学部の学生委員会が主催など)就職セミナー、教員採用試験講座等も開催されている。

Ⅳ スポーツ健康科学課程におけるキャリア教育

スポーツ健康科学課程は、平成20年度スタートした教育学部生涯学習群に属する新課程で、定員20名の学生は、1年間授業を受けた後2年次にスポーツ指導者養成コースとスポーツ・キャリア開発コースのどちらかを選択する。本課程の新入生は全員が運動部活動でのスポーツのキャリアを有しており、1年次オリエンテーション「将来の職業は？」の質問に「まだ決めていない」という回答以外、「体育教員」「スポーツ指導者」がほとんどであった。当然のことながら、新入生は漠然とした将来像から大学生活を始動するため保健体育講座では1年次からのキャリア教育への早期取り組みを位置づけた。スポーツ健康科学課程のカリキュラムにおいて、次のようなキャリア教育にかかわる授業の流れを策定した。

1年前期→共通教育 初年次科目「新入生セミナー」

* 「学校訪問・企業訪問」などキャリア教育にかかわる授業内容が含まれている。

1年後期→スポーツ・ダンスキャリアデザイン論

課程必修 2単位

* スポーツ、ダンスのキャリアを活かした職業観を培う。

* この授業の最終講義でコース選択を行う。

2年前期→トップアスリート論

スポーツ・キャリア開発コース必修

* スポーツ指導者養成コース学生も受講できる

コマに設定している。現在のスポーツ指導者養成コース2年生は全て受講している。

- * 社会人基礎力の向上, 社会人マナー, パブリック・スピーキングの習得, 面接対応など実践的なトレーニングを継続して行う。

次に具体的な内容の取組について, 事例を紹介する。

資料①初年度試行的に行った2008年の本授業報告, 資料②は2009年度のスポーツキャリアデザイン論の学生配付用シラバスである。尚, 2008年シラバスは報告内容と重複するため, 掲載を省略した。

資料①

科目区分スポーツ健康科学課程2008後期

担当教員: 牛山眞貴子

スポーツ・ダンスキャリアデザイン論授業評価報告

教育学部 保健体育講座 牛山眞貴子

1はじめに

本授業は、今年度教育学部新課程としてスタートしたスポーツ健康科学課程1年生(一期生として入学した)必修の授業である。新しい科目として初めて設けられた。

この課程では一年次終了後もとの健康スポーツコースを踏襲/継続していくスポーツ指導者養成コースと学生がこれまで培ってきたキャリアと潜在するセカンドキャリアを活かして、社会で活躍できる人財を育成するスポーツキャリア開発コースに、学生の進路選択によって、分かれる。本授業の中で、学生のキャリア形成を支援できることが期待されている。

2受講生の構成

スポーツ健康科学課程1年生 21人

健康スポーツコース3年生1人

3授業の目的・到達目標

授業目標

- 1) スポーツやダンスのキャリアをどう活かすかについて、自己記録・話題提供・事例提供を参考に考察を行う。
- 2) 職業観を広げ、スポーツ・ダンスそれぞれの特性を明確にしていきながら、自己の適性と照合し、現段階の「未来図」を推論し作成する。
- 3) 大学の学びの中で、さらにキャリアを開発し、キャリアアップしていくための今後の課題を考え、認識する。

到達目標

- 1) 自己のスポーツやダンスのキャリアを小学校から今日まで列記し、系統立てて述べる事ができる。
- 2) これまでのスポーツ/ダンスの種目特性と照合しながら、キャリアを自己分析することができる。

3) 話題提供者・事例提供者の話に耳を傾け、質問項目を作成し、尋ねることができる。

4) キャリア開発やキャリアアップのためにこれから自分が何をしなければならないかを整理し、述べる・書くことができる。

5) グループワーク・ディスカッションの中で、自己の役割を踏まえて、話し合いに対応することができる。

6) グループワーク・ディスカッションの中で、構成員と協力し合い、課題を遂行し、まとめることに貢献できる。

4授業内容/スケジュール

- 1) ガイダンス 就職に関する日本の現状、キャリアデザインの必要性「10年後の私」
 - 2) スポーツで培われる能力、ダンスで培われる能力を知る
 - 3) スポーツをビジネスにする(講師を招き話題提供)
→パネルディスカッション
 - 4) ダンスをビジネスにする(講師を招き話題提供)
→パネルディスカッション
 - 5) スポーツ以外の仕事に就く(講師を招き話題提供)
→パネルディスカッション
 - 6) ダンス以外の仕事に就く(講師を招き話題提供)
→パネルディスカッション
 - 7) より専門性を磨く、研究職への道①(大学院生、大学教員による事例提供)
→パネルディスカッション
 - 8) より専門性を磨く、研究職への道②(大学院生、大学教員による事例提供)
→パネルディスカッション
 - 9) 私のスポーツキャリア、ダンスキャリアから見えてくる様々な未来図
→そのためには今何をすればいいか
 - 10) 自分を伝える①(筆記)
書く、まとめる、グループワーク、ディスカッション
 - 11) 自分を伝える②(筆記)
書く、まとめる、グループワーク、ディスカッション
 - 12) 自分を伝える③(話す/聞く)
スピーチ、対話、グループワーク、ディスカッション
 - 13) 自分を伝える④(話す/聞く)
スピーチ、対話、グループワーク、ディスカッション
 - 14) 自分の未来図となるキャリアデザインを作成する。
基本的なマナーとスキルを身につける。レクチャーデモ
ストレーション
 - 15) まとめ、評価、
- 5授業アンケートによる授業評価報告
(1)アンケート項目について

いかに示す内容が講義最終日2月3日に行ったアンケートの内容である。

授業アンケート「スポーツ・ダンスキャリアデザイン論」
2009.2.3

次年度以降の授業の参考にしたいと思いますので、アンケートのご協力をお願いします。

氏名 _____

<授業について>

該当するものに○をつけてください。

- ① 授業の内容は理解できるものであったか。
はい 11 いいえ 10 どちらでもない 0
- ② 授業は将来を考える上で、役に立つと思うか。
はい 11 いいえ 10 どちらでもない 0
- ③ 自己のキャリアを振り返るワークや話題提供者によるディスカッションに積極的に取り組めたか。
はい 11 いいえ 10 どちらでもない 0
- ④ 冬休みの教員へのインタビュー課題について
参考になった 11 参考にならなかった 10 どちらともいえない 0
- ⑤ 今後、この授業を受ける後輩たちへのメッセージ

(2)各項目の結果

授業の内容は理解できるものであったか。

はい 22 いいえ 0 どちらでもない 0

授業は将来を考える上で、役に立つと思うか。

はい 22 いいえ 0 どちらでもない 0

自己のキャリアを振り返るワークや話題提供者によるディスカッションに積極的に取り組めたか。

はい22 いいえ 0 どちらでもない0

冬休みの教員へのインタビュー課題について

参考になった 20 参考にならなかった0 どちらともいえない2

今後、この授業を受ける後輩たちへのメッセージ

- 自分の道や可能性を知ることができたと思います

- 授業を受けて選択の幅や知識が広がり、進路について考えるようになったと思います。
- とても中身の濃い授業をありがとうございました。
- 他学部学科の授業では学ぶことのできない内容でした。この授業を受けて将来への新しい考え方や実行力がつくと思います。
- 自分の生活を見直すきっかけの授業となりました。将来のことを考えるにあたってかなり刺激になる授業でした。
- 2年生では自分の可能性を広げられるようにしたい。
- 悩むことは自分を見つめるよい機会になるのでしっかりと悩んでください。
- この授業で自分の中の何かが変わると思います。絶対休まない方がいい。
- OB/OG のお話はとても参考になるので時間を大切にしてください。
ほか、全員がポジティブな方向への感想/意見を書いていた。

6まとめ

授業について非常にいい評価をしてもらったと思うと同時に、この授業への期待の高さとその期待にしっかり答えていきたいと気持ちの引き締まる思いがした。特に学生のキャリア教育の重要性が、期待と同様に伝わってくる後輩へのメッセージがほとんどであり、このスポーツキャリア開発コースは次に担当する必修の授業「トップアスリート論」他多くの新しい開設科目があり、その授業の内容を精査し、潜在する力とセカンドキャリアを引き出すチャンスを支援したいと考える。

1年生がスポーツやダンスのキャリアを知り、活かす方向へ動機付けを行う。この授業初期段階の目的は果たせた。ネガティブに自分の将来を捉えないで、自分の可能性をこれから開くのだというマインドに貢献できたと思う。この後2月10日に実施したコース分けも順調に行なうことができた。

資料②

科目区分スポーツ健康科学課程2009後期

担当教員:牛山真貴子

スポーツ・ダンスキャリアデザイン論授業シラバス

教育学部 保健体育講座 牛山真貴子

1はじめに

本授業は、教育学部新課程としてスタートしたスポーツ健康科学課程1年生必修の授業である。一課程の中でその専門性を活かす独自のキャリア教育をカリキュラムに組み

込み、支援する大学は全国的にも少なく、非常に注目されている。

この課程では一年次終了後、地域のスポーツ教育者・指導者を育成するスポーツ指導者養成コースとこれまで培ってきたキャリアと潜在するキャリアを開発して、スペシャリストや進学、企業で活躍できる人財を育成するスポーツキャリア開発コースに、学生の希望による選択によって、分かれる。本授業の中で、学生は納得のいくコース選択を行ない、自己の将来をデザインする力を身につけることが期待されている。

2授業の目的・到達目標

<授業目標>

- 1) スポーツやダンスのキャリアをどう活かすかについて、自己記録・話題提供・事例提供を参考に考察を行う。
- 2) ゲストスピーカーの話題提供から職業観を広げ、スポーツ・ダンスそれぞれの特性を明確にしていながら、自己の適性と照合し、現段階の「未来図」を推論し将来をデザインする力を身につける。
- 3) 大学の学びの中で、さらにキャリアを開発し、キャリアアップしていくための今後の課題を考え、認識する。

<到達目標>

- 1) 自己のキャリアを今日まで、系統立てて述べるができる。
- 2) キャリアを自己分析することができる。
- 2) 話題提供者・事例提供者の話に耳を傾け、質問項目を作成し、尋ねることができる。
- 3) キャリア開発やキャリアアップのためにこれから自分が何をしなければならないかを整理し、述べる・書くことができる。
- 5) グループワーク・ディスカッションの中で、自己の役割を踏まえて、話し合いに対応することができる。
- 6) パブリック・スピーキング、社会適応力(マナー、スキル)を理解し行動することができる。

3授業内容/スケジュール

(ゲストの都合によって若干の順序の変更あり)

1) ガイダンス 10.1

授業を受けるマナー、心構え

キャリアデザインの必要性「10年後の私はうなっていたいか」

2) 就職に関する日本の現状 働く理由 10.8

就職内定率、有効求人倍率の推移、正社員と派遣社員、派遣切り、リストラ、就職活動

グループ模擬面接(7名/20分)

3) 自己のキャリアから見えてくる様々な未来図①

→職業観の洗い出し→フローチャート作成→そのためには今何をすればよいか

グループ模擬面接(7名/20分) 10.15

4) 自己のキャリアから見えてくる様々な未来図②

公共性、リーダーシップ、アシスト、段取り力

ボランティアイズム他

グループ模擬面接(8名/20分) 10.22

5) 自己のキャリアから見えてくる様々な未来図③

どのような人物を、働く場としての社会(企業/学校他)は求めているか。

社会基礎力に含まれる、専門性以外の学力とはなにか。例) SPIの問題を解いてみよう。

社会人基礎力に欠かせない、パブリック・スピーキングとは何か。

グループ模擬面接(8名/20分) 10.29

6) 社会人基礎力をつける。

SPIテスト1回目

バーバルコミュニケーション編1

パブリック・スピーキング

2分間スピーチトレーニングで自分を磨く11.5

7) 社会人基礎力をつける。

SPIテスト2回目

バーバルコミュニケーション編2

パブリック・スピーキング

2分間スピーチトレーニングで自分を磨く11.12

8) 社会人基礎力をつける。

SPIテスト3回目

ノン・バーバルコミュニケーション編

パブリック・スピーキング/3分間スピーチ

トレーニングで自分を磨く11.19

9) 社会人基礎力をつける。

SPIテスト4回目

ノン・バーバルコミュニケーション編

パブリック・スピーキング/3分間スピーチ

トレーニングで自分を磨く11.26

10) スポーツをビジネスにする①

(ゲストを招き話題提供)フリー・スポーツトレー

ナー西野吉幸氏→パネルディスカッション→レポート提出

4分間スピーチトレーニングで自分を磨く12.3

11) より専門性を磨く①

研究職への道(大学院生・大学教員による事例提

供)愛媛大学教育学部大学院M2八木和氏→パネル

ディスカッション→レポート提出12.10

12) スポーツをビジネスにする②

(ゲストを招き話題提供)エアロビクス・インストラクター井門

恵理子氏→パネルディスカッション

→レポート提出12.17

◎冬休みの課題として「地元の教員に会い、面談をしてレポートする」課題を与え、レポート提出

13) スポーツ以外の仕事に就く

(ゲストを招き話題提供)愛媛新聞社記者山本憲太郎氏→
パネルディスカッション→レポート提出

・1.14

14)より専門性を磨く②

研究職への道(大学院生、大学教員による事例提
供)愛媛大学教育学部教授浅井英典氏→パネルデ
ィスカッション→レポート提出1.21

15)まとめ、評価

自分のキャリアから未来図となる将来をデザイン
する。デザイン力を量るテストを行なう。希望調
査によるコース分け、希望者には個別相談に応じ
る。1.28

V 省察

(1) 2008年度取組からの課題

初年度2008年度は全くの手探り状態でスタートした
ため、授業方針の一貫性、講義日程の組み方、知識の
定着を確認するための手段の検討が不十分であった。
また社会人マナーへの切り替えと対応が甘く、当初授
業マナーの著しく悪い学生の改善が捗らなかった。社
会人マナーを身につけることがなぜ「今」必要なのか
を明確に説明し、受講生にこの授業の目指す目標の本
質的な意味を授業当初にまず理解させることが課題と
して残された。ゲストスピーカーの確保は、ゲストを
お願いした方々の献身的な協力のおかげで初年度の試
行にもかかわらず、非常にスムーズに確保ができ、講
義内容も適切で職業観の広がる深い内容であった。

特に、強化しなければならない点として社会人マ
ナーと話す力が挙げられる。特に学生の話す力は、仲間
で通じる話題には対応できるが、①言語の用い方等、
仲間同士の会話の域を抜け出せない ②話を短時間に
まとめきれない③メモを取りながら人の話を聞く習慣
が身につけていない ④世の中の動きに疎い ⑤話す
内容が薄く、また返す質問も薄い⑥メモに書くこと、
話すこと共にスピードが遅い ⑦人前に立つと聴衆に
視線を送ることができず意識が内向化し、聴衆との言
語以外のコミュニケーションが取れず棒立ちになる等、
特にパブリック・スピーキングの課題が多々残された。

(2) 2009年度取組の方針

2009年度のシラバス(資料①)の示すように、前年
度の課題を改善するために次の基本方針を立案した。
<身につけさせたい能力>

- A 社会人マナー、社会人基礎力の理解
- B キャリアデザインの必要性
- C 就職に関する日本の現状把握
- D 職業観の広がり、働くことへの動機付け

E 社会人の基礎知識-SPIを解く、グループ面接の体験
F パブリック・スピーキング(バーバルコミュニケー
ションとノンバーバルコミュニケーションの強
化)の強化

G 傾聴力と質問力の強化

H スピード突破力(書く、話す、課題の対応)を身に
つける

授業では、社会人マナーの実践として社会人基礎力
を身につけるため次のマナーとルールを設定した。

I 授業マナーとルール

社会人マナーとルールをベースとする以下の授業マ
ナーとルールにしたがって、本授業は実施する。

① はじめの挨拶 立つ→目を合わせる→一礼「お願い
します」

目上の人よりも早く頭を上げない(例)上司、顧客、
ゲスト、クライアント、指導者他

出席を取る→相手にハッキリ聞こえる声で返事をする。
無言、小声、目だけの返事は×
→直るまでやり直す。

② 机の上に食べ物、飲み物を置かない。(医者から水
分摂取の要請があれば別)→注意後、取り除く。

③ 授業中、他の事、内職をしない。注意、評価→減点
する。

④ 携帯マナーモード、メールの送信→必要な場合許可
を取る。

⑤ 授業中、教室で寝ない。どうしても眠気が押さえき
れない場合は、一礼して退室すること。体研やリフ
レッシュルームで寝ればよい。授業に戻ってこない
場合は、欠席扱い→5減点する。戻った場合でも、
評価→3減点する。

⑥ 私語会話は厳禁。注意、評価→状況の程度に応じて
減点する。グループディスカッションでは意見交換
を活発に行なう。評価+1~5の範囲で加点する。

⑦ 遅刻 注意、-3減点する(20分以内)

⑧ 欠席 -5減点する。無断欠席は-10減点する。大
会のための欠席は事前届け(顧問の証明があるも
の)がある場合欠席扱いにしない。

⑨ 提出物 5回以上の提出物がある。遅れて提出した
場合→5減点、未提出→10減点する。評価+1~5
の範囲で優れた内容は加点する。

⑩ 終わりの挨拶 立つ→目を合わせる→一礼「ありが
とうございました」目上の人よりも早く頭を上げな
い。相手に聞こえる声で感謝の言葉は言う→でき
るまでやり直す。

⑪ 椅子と机を整える。ゴミを持ち帰る。持ち帰ってな
い場合→注意 状況の程度に応じて減点する。

⑫ 授業内での活動において、分け隔てなく誰とでもワ

ーキングできること

- ×約束が守れない。
- ×嘘をつく。不注意、迷惑をかける。
- ×いつも同じ人とワーキングする。
- ×人に対する好き嫌いの感情を仕事に持ち込む。公私の行動、人間関係の区別がつかない。
- ×ワーキングでハラスメント（いじめ）を行なう。
- ×わがまま、人に仕事を押し付ける。責任転嫁する。

→幼児性の残る行動

幼児性行動の残る人

社会、企業、職場で採用が最も嫌がられ、社会適応ができない人材と判断され敬遠される。

教育現場、企業から「大学教育は一人前の人間として恥ずかしくない社会適応力を身につけさせるべきだ」という訴求が強まっている。

さらに授業では上記のAからHまでの要素を2ないし3盛り込むように内容を構成し、時間配分と到達目標を明示した。グループ模擬面接は、公開で行い、面接者以外は聴衆として面接を傾聴し、必要事項のメモを取った。

SPIは、言語と教理の問題を取りあげ、時間を厳守してテストをし、その場で答え合わせを行った。

スピーチ・トレーニングについては、当日テーマを与え、パブリック・スピーキングの基本である「イントロダクション」「ボディ」「コンクルージョン」に関する簡単なメモを3分間でまとめ、原稿は作成させない。その後くじ引きで発表者を決めて、メモに時々目をやる程度は許可し、1人ずつ発表する。発表後、その場で内容について評価と改善点の指導を行った。

ゲストスピーカーによるパネルディスカッションでは、50分間のゲストからの話題提供後、質疑応答の時間を20分間取った。その内容のまとめとゲストへの感謝の辞を課題として翌週の火曜日までに提出させた。

前述のスピード突破力とは、藤原（2009）が提唱する物事に対処する時間感覚（クロック）のことである。藤原は、リクルート社フェローから前杉並区立和田中学校校長に転身し、「夜スベ」他これまでの学校経営にはない多くの施策を実践してきたことでも知られている。経営の基本「『いい』と思ったことはまずやってみる。ダメなところはやりながら修正していけばいい。本当にダメなものなら思い切ってやめてしまえばいい。」すなわち、意思決定のスピードを速め施策の実行を迅速に行なう改革を社会よりも大分遅れがちだった学校のクロックに応用した。多くの学校経営に携わる者が藤原の影響を受けた。この藤原の「スピード突破力」は学校だけでなく、意思決定のスピードが遅いあるいは自分で意思決定することが苦手な大学生の課題

を解く鍵を示唆している。スポーツ・ダンスキャリアデザイン論では「大学生クロックと社会人クロックの違い」を解説する際に藤原のスピード突破力を引用した。

「大学は何でも待ってくれる」「遅刻だから大丈夫」「1時間目がないから10時まで寝ていよう」「言われるまでしないでおこう」等、藤原からの知見より遥かに低レベルの話題提供からではあったが、まずは大学でしか通用しない時間の観念を学生が捨てることへの説得力のある講義内容を組むことができた。

VI 結語 今後の展望

キャリア教育は、教員の学生全体に向けてのキャリア形成のための情報教示と支援だけでは対応しきれない。学生のキャリア形成は速度も違い、また方向性も多岐に渡っている。体育・スポーツ専攻生は、厳しい自己修練に耐え、勝つこと負けること、思うようにいくといかないことを知り、集団の中の個人としての行動を学んできた。このスポーツ・キャリアが既にあるからこそ、大学で高い社会人基礎力に到達できる可能性を有している。しかし、あくまで体育・スポーツ専攻生は「未完の利器」であって、スポーツの継続と部活動だけでは培われない。その潜在能力の開発のために、社会との接点を持ったキャリア教育の中で磨かれなければならない。未完のままでは終るだろう。

スポーツ・ダンスキャリアデザイン論の授業を担当して、授業担当者のキャリアへの理解、キャリアに関する知識、社会情勢把握、社会人基礎力養成へのプランニング力、そしてこれからはカウンセリング力が求められていることが分かる。なぜなら、体育・スポーツ専攻生のほとんどが、1対1の対話と1人で課題に向き合う経験を今後も必要としているからである。本質的なキャリア教育の成果を上げようと望むならば、1対1のキャリア・カウンセリングと1人で複数の相手に向かって行動する機会を納得いくまで経験するための支援体制がカリキュラムの中に求められる。カリキュラムの中で、学生は、早期のうちにキャリアをどう活かすかをデザインする力を身につけなければならない。やがて次段階では「自己の強みと、克服すべき課題」、適性について個別対応で細やかに見てくれる指導者の力を借りながら、キャリアを自力で切り開く自己投資に励行することが、納得して進むことができる将来への最善・最短の道となっていくに違いない。

文献

- 戸田智弘(2008) 働く理由 ディスカバー・トゥエンティワン：1-7, 222-232
- 田路則子・月岡亮(2008) キャリアデザインライトワークス：008-011
- 藤原和博・勝間和代(2009) 仕事学のすすめ NHK出版：スピード突破力：136-153
- 城繁幸(2008) 3年で辞めた若者はどこへ行ったのか 筑摩書房
- 愛媛大学ガイドブック2008, 2009, 2010 愛媛大学教育 学生支援部学生支援部入試課
- マイナビ編集部(2009) SPI解法の極意. 毎日コミュニケーションズ：10-51, 108-123
- 小杉礼子(2007) 大学生の就職とキャリア 勁草書房
-